

あとがき

エントロピーとロト・デッサン —北代省三新作展に寄せて—

佐谷和彦

今年のオマージュ瀧口修造展（第14回）は、北代省三（1921～）である。「エントロピー — 造型における無秩序の実験」と題し、オブジェ、レリーフの作品大小20点の新作を展示する。別室には初期（1948～52）の作品（油彩）も展示するので併せてご覧いただきたい。

カタログのテキストは次のとおりである。

- ・秋山邦晴：芸術における“遊戯”的創造と想像力
- ・山口勝弘：エンジニア・眼識をもった仙人

また作者の北代省三さんから、「ローズ・セラヴィのこと」と題するエッセーおよび「製作ノート、あるいはメモ」の二編をお寄せいただいた。秋山、山口、北代の三氏はともに実験工房のメンバーで、北代省三がもっとも年長である。秋山、山口の両氏は北代省三の人間、作品を最初から現在に至る45年余りの年月にわたって見守ってきた人物である。したがってこのお二人の北代省三論は読み応えがあり説得力がある。この両エッセーにより北代省三のしごとの全貌が明らかにされている。特に新作のしごとの意味がみえてくるのはありがたい。そして私はこの両エッセーの底に流れる友情を感じているのである。ご多忙のなか、ご寄稿いただいたお二人に厚く御礼申し上げる。

北代省三の「ローズ・セラヴィのこと」は北代さんの瀧口修造先生に対するオマージュのメッセージである。文中、北代さんは「瀧口修造はオブジェ創造の名人だった」と記されている。私もその通りだと思う。ものが先生の手に触れると、たちまちそれは変貌してひとつの作品にみえてくるという趣きがある。鍊金術の大家である。ウフフとひそやかに笑っておられる瀧口先生の顔が私にはみえてくるのである。北代省三の瀧口修造に対する想いが熱く伝わってくるこのエッセーをお寄せいただいたことをうれしく思っている。ありがとうございます。

北代省三の名前はつとに承知していたが、私が初めてお会いし、言葉を交したのは1989年7月の「北代省三展」（村松画廊）の時である。構成主義的な作品を興味深く拝見した。

それから2年後、第11回オマージュ瀧口修造展「実験工房と瀧口修造」に際し、北代さんを含む同人の作品を展示したが、その時、さまざまな交渉があった。作品もさることながら、カタログの実験工房の年譜については大変なご協力を得た。北代さんの実験工房に関する資料すなわち写真、パンフレット、カタログ、新聞等の展評、記事等々の集収、整理、保存は見事なものである。そのエネルギーは恐るべきもので、尋常ではない、と感嘆した。この北代資料がなければ、あのカタログは実現しなかった。以来、北代さんとのお付き合いが深まり、今回の展覧会となつた。

北代さんご自身の年譜を読むと、これは面白い。実に多様なしごとをしておられる。『模型飛行機入門』（'76）などという本を出版されているところなど秀逸である。どんな本か興味深い。理科系の人だということが分る。

「1948年美術雑誌『創美』で瀧口修造を知る。」と記されているのに、私はオヤ！と声をあげた。というのも、実は私も北代さんと同じようにこの雑誌で瀧口修造を知ったからである。

その当時、私は金沢の第四高等学校の理科の学生であった。しかし理科系の学問になじまず、文学、美術の世界に急速に魅かれていた頃であった。力学の講義を聴くのが苦痛で、熱力学となるとなおさらであった。つまり私はエントロピーが難解で分らず、理科の世界から脱落した男である。エントロピーという言葉は知っていても、内容はカイモク分らないのである。エントロピー！ああ、何という不思議な音の響きよ！と感じるぐらいのところである。ただいまの私は。

ところが、北代さんの今回の展覧会の題名にエントロピーとある。大変なところでエントロピーと再会する破目に落ちたな、と思った。早速、平凡社の大百科辞典で、その項目を引き、読んだが、数式のむつかしいのが出てきたので、直ちに放棄した。そのエントロピーについて、北代さんは「製作ノート」で丁寧に解説しておられる。私も読んで理解できる。これは必読である。今回の北代省三のしごとはこのエントロピーの概念の理解があれば、さらにみえてくるのだ。

瀧口修造のロト・デッサンは北代省三の考案した装置により作成されたものであることを教えてもらった。『コレクション瀧口修造』（みすず書房刊）の月報に、北代さんが寄稿されているエッセー「瀧口先生についての三つのエピソード」を読んで分った。つまり、ロト・デッサンは瀧口修造と北代省三の共作なのだ。この機会にロト・デッサンを改めて眺めた。真黒な紙に、ひそやかに鈍く銀色に光る円型のすがたをみた。この沈黙の動きは美しい。

このように、北代省三は自分で機械、装置を作り出すことができる人である。自分の作品を作る道具、機器を自分で作り出しが出来る作家なのだ。そこに北代省三の真骨頂がある。その証拠に、北代省三のアトリエに行くと、工作機械のある仕事場は生き生きと輝き、見る者を魅了する。作家の秘密がみえてくるスペースなのだと。

この展覧会を機会に、北代さんの今後ますますのご健闘をお祈りするものである。われわれに新鮮なおどろきを示して下さい。

今回のカタログについてひとこと。山口勝弘さんのサジェクションにより、斎藤さだむ（写真撮影）、森ト桜（編集）、北川一成（アートディレクション）、益成宏樹（デザイン）の四氏にカタログ作成をお願いした。このメンバーは筑波大学出身の皆さんである。記して感謝の意を表する次第である。

最後に、この展覧会は、瀧口綾子夫人に見ていただければうれしいと思う。お見えになるであろうか？綾子夫人のご回復を心から祈念するものである。

1994年6月6日